

インフルエンザに対する新薬開発の動きはあるが、タミフルなどと同じく、ウイルスの方で耐性ができるという問題がいつも起こり得る。また新型インフルエンザの場合、既存のインフルエンザと違って私たちに狭い意味での免疫がなく、感染爆発が予想されている。そうになると社会的に混乱し、病院で簡単に治療を受けられなかったり、病院に行くことが反って感染する可能性を高めたりということもある。

これを機に私たちは東洋医学の伝統を取り戻そう。インフルエンザ対策として、ぜひ麻黄湯・麻黄附子細辛湯・真武湯を備蓄しておこう。エキス剤（顆粒）を冷凍庫か冷蔵庫に保存すれば、かなり長持ちする。

インフルエンザは通常のカゼと比べて、増殖力が強く、通常、急激に強い症状になる。漢方ではカゼを「中風」と「傷寒」と分けているが、インフルエンザの場合は「傷寒」である。「傷寒」は典型的には頭痛、発熱、悪寒、無汗、筋肉痛、関節痛、喘ぐ様な呼吸となり、基本となる薬は麻黄湯である。インフルエンザであるかどうかは関係ない。

問題は飲み方である。薬局などの説明や薬箱の説明では「1日3回」となると思うが、それは本来の飲み方とは違っている。原典である『傷寒論』には飲み方の注意が記されている。

1回分を飲んだらすぐに熱い薄い粥を飲み、布団をかぶって、発汗を促す。2時間程して全身に薄く発汗し、状態が変われば、それ以上飲まない。発汗しない場合には、同じ様に更に1回分を飲む。それでも発汗しない場合には、1回目より間隔を少し縮めて、更に同様に1回分を飲む。同様にして、重い場合には2・3日分に及ぶ。

羽生総合病院和漢診療科医師・高木氏も

『いやしの道』5号でこう書いている。

風邪を漢方薬で治療するのに、適方を選ぶのはもちろんのことですが、さらに十分な量を飲まないとい効果が足りません。漢方薬エキスの説明書きには「一日2～3回」と書いてあるものが多いですが、それではほとんどの場合あまり効果が望めません。発汗剤であれば発汗を目安に、麻黄附子細辛湯などでは寒気がとれることを目安にして、2～4時間ごとに、十分な効果が現れるまで続けます。三十分くらいで追加する場合があります。一日に二日分ぐらいを内服することはざらにあります。

葛根湯や麻黄湯は発汗剤である。つまり「1日3回」という様なのんびりした飲み方ではなく、発汗を目安に2時間に1回ぐらいで追加して飲んでいくわけである。こうしてこそ麻黄湯は本領を発揮できる。

ただ注意が必要である。発汗して激しい状態から脱した時に、まだ熱があるからといって、更に飲ませてはいけない。更に飲ませて、汗がだらだら出る様な発汗をさせると、衰弱して危険である。万一そうなった場合の為に用意しておくのが真武湯である。

インフルエンザでも陰証の場合（43を参照）には麻黄附子細辛湯を使う。

以上は、インフルエンザに対する救急的対策として説明した。そのまますんなりと回復すれば問題ないが、危機を脱した後にはどう変転するかは患者本人の体質（慢性的な気や毒のあり様）によって変わって来る。その状態に応じて、次に飲む漢方薬は選ばれる。

日頃からカゼに対して、桂枝湯や葛根湯、麻黄附子細辛湯などを本来の使い方を使い慣れ、効き目に自信を持っておくことが肝要だろう。（2009年3月啓塾）